

六花



2010

平成22年

俳句雑誌りっか

Cover designed by Little Bird

12月号

こ 腰湯してをれば亥子の響きくる
れ 蓮根を掘りては脇に寝かせおく
も 餅臼を洗ふを終えし藁に湯気
い 市の立つ石畳に露しとどかな
ま 勾玉を包める障子明りかな
は 初雪の伊^い吹^ぶ山^きに海の光かな
む むかご飯能登の粗塩ひとつまみ

か 悴める手でつかみたる鉋屑
し 時雨るるや近江は鮎を寝かせおき
え 悦に入る茶の花生けし古丹波
ち 宙空に奥祖谷の冬灯かな
ご ごしごしと障子の棧を洗ひをり
の 伸し餅を撫でては膚をととのふる
く くるひなく深き溪へと散る紅葉

こ 苔に散る紅葉の濡れてをりにけり
れ 連絡船見送る息の白かりき
も 森に入る美しき枯葉に導かれ
い 猪の尻に仔を連れ餌を探す
ま 豆殻の煙を纏ふ丹波かな
は 初氷せし日の月の鋭さよ
む 蒸芋にこびりつきたる塩甘し

か 襖底に貼り付きみたる枯葉かな
し 白息に我が身の内の熱を知る
え 襟巻の目に街燈の映りをり
ち 散紅葉焰の中に果てにけり
ご ごつごつと巖を晒し水涸るる
の 鑿の音響き渡れる枯野かな
く 蠟蜘蛛の囿に色とりどりの枯葉かな

満目の星八月の七日かな

梶浦玲良子

まんもくのほしはちがつのなぬかかな かじうられいりようし

はやばやと橋霜降の灯をかかぐ

桐の実の風売つてをり蚤の市

水拾ふせんなき精霊とんぼかな

萩揺るる夜やうすべにの月泳ぐ

「七日かな」が鳥肌を立たせるほどの感動をもたらすとは。八月七日の万感たる思いを体重に乗せてきた。八月六日は広島被爆、九日は長崎被爆。広島と長崎の間が七日という重大な夜だ。満目蕭条たる星が被爆者の阿鼻叫喚のごとくひしめく。満目とは「満目荒涼たる戦野」などと形容するように掲句に使われるために存在していた言葉。その時はたまさか七夕の星を見上げていたのかも知れぬ。が、その大悲劇を後で知った衝撃の思いが言葉になるまで何十年も練り返し、余分なものが風化し、また削ぎ落とされて核が残った作品。嗚呼！一読者としての感動を書ききれぬ。

七 日

梶浦玲子

はやばやと橋霜降の灯をかかぐ
桐の実の風売つてをり蚤の市
満目の星八月の七日かな
水拾ふせんなき精霊とんぼかな
萩揺るる夜やうすべにの月泳ぐ

桂 林

笹村政子

遊船や停まれれば迫りくる奇峰
刈り残る藻のあをあと漂へり
引き抜きし杭の湿りに秋の蟻
月代や影の揃はぬ太極拳
路地に干す土の匂ひの唐辛子

玉の汗

松本文一郎

潮騒の中に咲きたる海桐とべらかな
冷奴 大山詣の杖を置き
撒水に身を投げ入れて裸の子
釜底の飯粒拾ふ終戦日
大人たいじんの心眼くもる玉の汗

秋茄子

貝森光洋

いっこうに嫁の来ぬ家秋茄子
木の实隊コロコロコロトテチテター
老い楽の恋は危うし秋の蝶
にににににとうもろこしにかぶりつく
友という淋しきもあり桐一葉

せつじゆしゆう
雪樹集

炎 天

永 田

勇

杭つなぐ荒縄灼けて弛みをり
落日のやうやく涼し橋に風
秋冷の空に入りたる櫓かな
水澄むや鯉の背を踏む亀の足
炎天の地から生まれ来てたる風

月 光

出 口

誠

秋の朝鳥の首をかしげをり
座り込み耳鳴りを聞く秋の朝
月光の十字となりぬ屋根の上
月冴えて家の明かりを消させをり
起きやうと努力してをり今朝の秋

蛍雪譚 六甲

引き抜きし杭の湿りに秋の蟻

笹村 政子

人間の視線は本能的に動く物へ向く。しかし掲句は動いている蟻だけでなく引き抜いた杭の湿りにも目をむけた。その湿れる杭は地中から引き抜かれた証拠であって、自ずと蟻も地中に棲んでいたのである。蟻はある日突然何の前触れもなく地上に引き出され白日のもとに晒されて大いに慌てふためいているのである。中国旅吟の強みを發揮した。うろうん「湿りに」より右「湿れる杭」のほうが佳かったかなあ。夢風撰候補

撒水に身を投げ入れて裸の子

松本文一郎

近頃道路が整備されて見かけなくなった散水車も昔は炎天に道路が乾き埃が立つほどになると、役所が出した撒水車が路地を巡る。子ども達は喜び勇んで我勝ちに危険も顧みず水の吹き出し口へ「暑さに苦しむくらいなら」と言わんばかりに身投げするのである。散水車の運転手も阿吽の呼吸で、子ども達が水を被れるよう、わざとゆっくり走ってくれたりする、懐かしい昭和。現代はホースの撒水だろうが「身を投げ入れる」が巧い。夢風撰候補